

教授者と被教授者の2者関係における行動的コーチング  
—お菓子作りの場面を通して—

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
竹中 悠

コーチングとは、クライアントが目指す目標を達成させるための促進的アプローチのことである。

本研究では、被教授者の遂行や課題の性質によって指導方法が異なるであろうことに着目し、教授者のコーチング行動に影響を与える変数は何かということに関し、特にそれが被教授者の行動を独立変数としてどのように変化するか探求した。

研究1では、ケーキ製作場面で、教授者の教授行動を変化させる被教授者の行動はどのように記述分類できるか、教授者と被教授者の相互行動を記述、分析し、作るケーキは、ショートケーキ、シュークリーム、レアチーズ、ロールケーキとした。被教授者はお菓子作りの経験が浅い、あるいは大学に入って作らなくなった男女8人、教授者は家庭でお菓子作りを趣味とした大学院2年の女性で実験を実施した。分析は、教授者から被教授者への行動、被教授者から教授者への行動の頻度であった。その結果、教授者の言語プロンプト、肯定的、手・指プロンプト、モデリング、身体的プロンプトを従属変数として想定した場合、独立変数と想定される被教授者の行動は、確認、評価、完了、報告、遂行、表情、困惑に分類することができた。課題間と男女間で比較を行ったところ、被教授者からの行動が多いことが観察された。被教授者の経験を詳細に調査したところ、ある程度習熟している被教授者が多いことから、被教授者の経験によって教授者の教授行動が影響されていることが観察された。

研究2では、ショートケーキの製作に限定して、被教授者をより経験のない人とし、教授行動を含めた相互作用を促進する狙いで、教授者と被教授者に対して90分以内で作るように別々で教示を行い、被教授者の確認、評価、完了、報告、遂行によって教授者の教授行動が変化するか確認した。製作の内容は課題分析の結果、12工程に分類された。その結果、全ての工程で教授者からの行動が多く、各課題の特徴による教授者と被教授者の評価によって相互作用が増加した。さらに、教授者の教授行動は、言語プロンプトの中でも指示、確認、説明、評価、肯定の5つに分類することができ、多種類であることが観察された。また、時間制限によって、教授者がハンドミキサーの使い方を説明する時、モデリング、言語プロンプト（説明）、代行の行動が観察された。

研究1と2から、教授者が経験のない被教授者を教える場合言語プロンプト（指示、説明）が多いことが観察された。